

ラウンジ展「同志社のGLOBAL
—京田辺とのあゆみ—」について

講演	小枝 弘和〔こえだ・ひろかず〕
講師紹介	同志社大学同志社社史資料センター社史資料調査員

はじめに

ーラウンジ展とは

同志社社史資料センター（以下、社史と略す）で社史資料調査員をしております、小枝と申します。本日は、キリスト教文化センター主催で実施している光館ラウンジでの展示についてのお話をさせていただきます。この展示は、社史が全面的に協力し、キリスト教文化センターと展示内容を作り上げています。今回は社史側の担当者である私から展示の内容を説明することになりました。

皆さんは光館を訪れたことがあるでしょうか。光館にはラウンジがあり、その南北には展示ケースと壁面にポスターパネルを貼り付ける展示スペースがあり、全てをまとめて新島襄関連資料展示スペースという名前が付されています。つまり、このスペースで行う展示は同志社創立者である新島襄の資料を展示することが大前提となっています。

ラウンジ展の目的と運営方法

今回で5期目を迎えたラウンジ展ですが、2015年3月に光館の完成と同時に始まりました。よって、ラウンジ展に関する準備は開館前から始まっていました。最初にキリスト教文化センターから社史へ展示協力依頼がなされたのは2014年10月1日でした。この時、展示内容の企画立案実施、展示環境の調整、展示期間の策定など展示運営全般についてのたたき台作成依頼を受け、社史の所長がこれを引き受け、私が担当となりました。まずは展示室のコンセプトを決定する必要がありましたので、次の四つのコンセプトを考えました。そのコンセプトとは「新島襄を知る」、「同志社を知る」、「同志社の歴史を生きた教材として学ぶ」、「同志社にかかわった人間としての共通認識（教養）の獲得」です。新島襄や同志社を知ることによどのような意味があるのか、現段階で直感的に私が意図することがわかる方はいないかもしれませんが。しかし、同志社を離れた後、自身が同志社出身者であることを強く意識する機会が年齢を重ねるにつれ、自身の交流が拡大していくにつれて増えていきます。多様な人生のバックボーンをもつ人とつながる社会において、同志社という共通項を互いにもつ年齢の違う人々が交流する時には、必ず新島襄や同志社に関して「知っている」ということが役に立ちます。また、新島襄の生涯はわずかに47年に満たないものでしたが、21歳から密出国し、31歳で学校を設立するなど、若い頃から新しいことに挑戦する人生でもあったと思います。時代状況や各人の置かれた環境が異なるので、新島襄の生涯そのものが皆さんの参考になるかはわかりません。しかし、一つのケーススタディとして、新島襄の生涯を知ることとは、身近な事例として皆さんがこれから歩む道での判断に何らかの示唆を与える可能性はあります。時代は違えども、150年前の同世代の若者がどのような状況でどのような判断のもと行動したのかを、自身の経験や指針と比べながら展示を見ていただきたいというのが、展示を企画した者のねらいであり、願いです。

そして、この四つのコンセプトを実現する展示運営方法の案を考えました。具体的には、春学期1回、秋学期1回の年2回実施し、8テーマで完結する展示運営案です。学部生の最短在籍年数4年間で展示内容の全てを見てもらえるように考えました。ただし、展示資料は展示環境を考慮して、基本的にレプリカで対応することにしました。この案をキリスト教文化センターで実施される展示検討部会で検討していただき、承認を得て、2015（平成27）年3月より第1期「同志社大学のキリスト教」第2期「新島襄と同志社」第3期「新島襄と自然科学」第4期「新島襄のGo Global—海を越えて—」と実施し、2017（平成29）年3月より第5期「同志社のGLOBAL—京田辺とのあゆみ—」を実施しています。なお、1997（平成9）年に田辺町が京田辺市として市制施行するに伴い、2001（平成13）年4月1日から田辺キャンパスから京田辺キャンパスと名称が変更されましたが、今回の話の中では京田辺という表記で統一します。

ラウンジ展

第5期のテーマは京田辺

ご存知のように、2016（平成28）年同志社大学京田辺キャンパスは開校30周年を迎えました。今出川キャンパスと比べれば、歴史的に新しいキャンパスといえますが、同志社が高等教育機関として歩みを進めるためには、絶対不可欠なキャンパスであったこともまた事実です。また、京田辺という土地も同志社に少なからずゆかりのある土地であり、この京田辺の地にキャンパスを開く意味はあったと考えられます。具体的な内容を、私が作成した会議資料から引用します。

展示趣旨及び展示資料選出

京田辺キャンパスは同志社と京田辺の関係を示すシンボルであるが、その関係は明治期からわずかながら存在し、その端緒は新島襄である。新島は1882（明治15）年京田辺キャンパスのすぐ近くに存在した南山義塾の開校式に参加し、祝辞を述べた。新島の永眠後は昭和初期に同志社内で組織された学生組織である同志社労働者ミッションが田辺で農村伝道を行ったという記録がある。京田辺は同志社と少ないながらも歴史的な接点を持つ地である。そして、キリスト教主義や自由主義という理念をその接点から感じ取ることができる。

今出川キャンパスは同志社が発展する礎と伝統を培ってきた場である一方、京田辺キャンパスは、戦後の進学率急増に伴う教学施設の拡充と発展に貢献してきた、いわば同志社の躍進を可能ならしめた場であると位置づけ、京田辺キャンパスの歴史的背景と同志社史における意義を示す。

第5期展示（案）提案書より抜粋（2016年12月9日 第2回同志社京田辺会堂光館展示内容検討部会）

私が会議で強調したことは歴史的関連性と、同志社史における京田辺キャンパスの意義です。歴史的な事実は創立者と京田辺の関係を示すだけでなく、同志社の教育理念であるキリスト教主義、自由主義と京田辺との接点でもあります。つまり、京田辺が新しいキャンパスの開校地に選出されるだけの意義があるということです。

一方、戦後、同志社が抱えていた問題を解消する重要な役割を果たしたのが京田辺キャンパスでした。参考までに、開校当時から学生数の増加を10年ごとに数字を出してみました。これによると、戦後急激に学生数が増加していることがわかります。しかし、1955（昭和30）年以降から約20数年間学生数はあまり増加していないことがわかります。1986（昭和61）年の京田辺キャンパス開校以降はまた緩やかながら学生数がさらに伸びています。この学生数増加の停滞期といえる期間の原因は1956（昭和31）年施行の大学設置基準がその一つです。同法令第37条には「大学における校地の面積（附属病院以外の附属施設用地及び寄宿舎の面積を除く。）は、収容定員上の学生一人当たり十平方メートルとして算定した面積に附属病院建築面積を加えた面積とする」とあります。現在の今出川キャンパスは11万4771㎡です。実際は文系学部が理系学部から面積の計算方法は異なりますが、京田辺キャンパスができる以前では、設置基準を満たせない状況下で大学は置かれていました。この時期は高度経済成長期であり、大学進学率が大幅に増加した時期です。高等教育を望む世間のニーズに対して各大学は苦慮していた時代であったと思います。同志社もそうした大学の一つであり、新たに学生を受け入れるため、あるいは教育施設を拡充するためには、新しいキャンパスを開校することは有効な手段でした。理事会での京田辺校地の購入決定は1966（昭和41）年で、1968（昭和43）年までに2度にわたって購入された99万817㎡、今出川キャンパス（11万543㎡）の約9倍に相当します（『事業報告書1968年』学校法人同志社 1969年5月）。新しいステージを考える際に不可欠な場所が京田辺キャンパスでした。

そして、展示を実施するためには展示可能な資料が必要です。これらの要素を示す資料が存在するということで、展示の仮タイトルを「同志社と京田辺」として会議に提出しました。内容を会議で検討していただいた結果、そもそも同志社はGLOBALな視点をもつ学校であり、同時にLOCALな視点での活動も行っていたことを示すのが京田辺と同志社の関係であることから、GLOBALとLOCALを掛け合わせた造語GLOBALを用いて、「同志社のGLOBAL—京田辺とのあゆみ—」が正式なタイトルとなりました。

発展の地 今出川

それでは展示の内容について話を進めていきます。展示は、まず今出川をテーマに始まります。今出川キャンパスを発展の地と位置づけ、1875（明治8）年の同志社英学校開校から、1920（大正9）年の大学令による同志社大学開校までの約45年を資料で振り返る内容です。

まずは今出川キャンパスの前史を振り返りたいと思います。比較的良好に知られていることですが、幕末には今出川キャンパスの一部が薩摩藩邸でした。現在、これを示す石碑も残っています。幕末の今出川キャンパス近辺の古地図を見ますと、薩摩藩邸が京都五山第二位の相国寺と禁裏を含む内裏に挟まれた、政治的に重要な意味をもつ場所にあったことが窺えます。現在の地図を見ても、薩摩藩邸が同志社大学に変わった程度で、南北の位置関係はさして変わりません。キリスト教主義学校である同志社は臨済宗の相国寺と天皇家ゆかりの京都御所に挟まれた、興味深い場所にキャンパスがあります。

ただし、同志社は開校当初から今出川の地にあったわけではありません。最初は別の場所でした。現在の新島旧邸がある場所、内裏の南東にあった中井家の屋敷を借りて同志社英学校が開校しました。今出川への移転は開校の翌年1876（明治9）年9月頃です。新島は最初から今出川での開校を目指していたようですが、土地入手の都合がついたのは開校後でした。最初の校舎といえる建物は学生寮と教室を兼ねた2棟の木造建築物でした。開校間もない頃の、寮として機能した2階の間取りを見てみますと、基本的には相部屋で一人当たり1・5畳から2・5畳程度の割合で割り当てられていたようです。当時の英学校は京都市から通うことができる生徒以外は全員が寮に入りました。しかし、在籍者数の推移を見ると、開校1年目で在籍者数が12人であったところが、開校から12年後の1887（明治20）年の頃には学生数が522人となり、その後も基本的には純増していきます。またこの年の学校の状況を見ていきますと、同志社英学校は同志社普通学校となり、さらに同志社神学校、同志社予備校、同志社病院、京都看護婦学校などの教育・医療施設がすでにありました。同志社予備校とは、大学設立を目指していた

新島が同志社内諸学校の学力底上げを考えて設立した学校です。他に、学生寮は8棟、煉瓦建造物は現在国指定重要文化財に指定されている5棟の内、彰栄館、礼拝堂、有終館の3棟がすでに存在していました。新島にとってあくまで英学校開校は過程であったと考えられます。新島は同志社を援助したアメリカの海外伝道会社であるアメリカン・ボードから年間3000円から4000円の資金援助を受け（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』1 同朋舎出版 1983年 202頁。以下①202）、さらには新島自身も大学だけでなく、教学施設設立の為に募金運動を展開して資金を集めています。同志社予備校が好事例です。

新島襄が同志社での教育で目指した人物像

さて、同志社内部の教育ですが、象徴する資料として「自責の杖」と「新島襄旧蔵聖書」の複製資料を常設で展示しています。各資料の説明はここでは省きますが、生徒らが行った授業への集団ボイコット事件の責任をとって罰として自身の手を叩いたとされる「自責の杖」は教育実践の責任主体者である教員の取るべき姿勢を新島が示した資料として今日まで受け継がれてきました。一方、「新島襄旧蔵聖書」は言うまでも無く同志社が142年間一貫して貫いてきたキリスト教主義を象徴する資料です。また、新島襄が示した同志社で育てようとした人間像を象徴する言葉が、当時の学生に向けて書かれた手紙の中にあります。「政事上之実況ハ実ニ着実ナル真面目ナル男兒ノ乏シキヲ覺ヘ、益良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ望テ止マサルナリ」（④245）。この言葉の中心部分が同志社内の各キャンパスにある良心碑に刻まれています。ここで新島襄が言う良心がどのようなことを指すのか、展示を通じて見てくるかと思ひます。

京田辺キャンパスの重要性

新島の学校運営は順調であったように数字から見えてきます。最初に借家で始まった同志社ですが、新島が永眠する1890（明治23）年には、私の計算では3万3806㎡の所有地に敷地内の建物、そのほかの資産を有する学校に発展しています（拙著「新島襄試論」『大学史資料センター報告32大学史活動』明治大学史資料センター 2010年 17～18頁）。現在の今出川キャンパスの面積が11万4771㎡（『ファクトブック同志社2015』学校法人同志社 2016年 179頁）ですので、同志社は開校から15年でそれなりの資産を備えた学校となっていることがわかります。また在籍者数は734人とあり、15年間で約60倍の在籍者数となりました。この後、しばらく同志社は混乱期を迎えますが、1912（明治45）年専門学校令に基づいて同志社大学開校が認可されます。さらに8年後には大学令に基づく同志社大学の開校が認可されました。わずかな間に2つの法令によって大学が開校しますが、これが意味するところは、同志社内で法的に認められた高等教育機関が初めて誕生したことです。同時に、同志社内に2つの新しい学校が増設されたことをも意味します。1912（明治45／大正元）年の在学者数が860人（『同志社大正元年度報告』同志社 1913年 21頁）、1920（大正9）年の在学者数が1812人と学校増設とともに学生数も増加し、同志社全体が学校として大きくなっていきます。日中戦争と太平洋戦争下で国内の学校は学徒出陣や勤労動員により大きな影響を受けますが、1948（昭和23）年に新制大学が発足し、日本が戦後の復興から高度経済成長を迎える中で、大学への進学率急増への対応と大学設置基準第37条などの法的枠組みに苦慮していきます。ここで新しいキャンパスの必要性が出てくるわけです。

京田辺と同志社の接点

学校法人同志社理事会在京田辺の土地買収の方針を決定したのが1965（昭和40）年8月でした（『同志社田辺校地30年の歩み』学校法人同志社 1995年 1頁）。その後、2度に分けて土地購入契約を結び、京田辺のキャンパス用地を入手することになります。これにより、大学設置基準にかかわる問題は解決へと向かうわけですが、実はこれよりも以前に同志社と京田辺には歴史的な接点がありました。その最初の接点は新島襄との接点です。新島は今から135年前の1882（明治15）年4月30日に京田辺を訪れています。その目的は、南山義塾開校式への参列でした。この時に新島が披露した祝辞の草稿が現存しています。この祝辞には、社員すなわち学校運営者、教員、父兄、生徒のそれぞれに対する言葉があり、学校を取り巻く人々に対する所感を述べています。さて、この南山義塾ですが、地元の有志らが資金を集めて創設した、自由民権運動の影響を受けた学校です。その設立は、1877（明治10）年に小学校卒業者を対象として棚倉孫神社で開校した盞齋（こうしん）家塾を発展させたもので、より良い教育を求めた塾生らの声に応じた学校でした。

他にも昭和初期に接点があったことが知られています。1927（昭和2）年12月9日、大学法学部中島重教授を中心に同志社労働者ミッションが組織されます。この組織は「すべての労働者（都市、農村、漁村、鉱山等の区別を問わず）にイエスの福音を宣伝し、神の御旨にかなえる新社会の実現を期す」ことを目的に掲げています。この組織に所属した学生は、卒業後に近畿圏の農村に伝道に行くのですが、そのうちの二人が綴喜郡草内村と綴喜郡田辺町（ともに現在の京田辺市）に赴き、実際にその地に移り住み、聖書講義や日曜学校を主催していたようです。一見関係が無いように見える同志社と京田辺ですが、このように、教育及びキリスト教を介した歴史的な関係のある土地であることは少なくとも窺えるかと思ひます。

京田辺キャンパス開校と工学部（現・理工学部）移転

かくして、同志社は京田辺にキャンパス用地を購入するのですが、開校準備に取り掛かるのは10年以上後になります。1980（昭和55）年8月、用地の土地造成工事が着工しました。そして、1985（昭和60）年1月から建物の建設が始まり、およそ1年2カ月で現在の京田辺キャンパスの原型が完成します。開校は1986（昭和61）年4月です。1980年に発行された広報用パンフレット『田辺校地について』を見ると、京田辺キャンパスの面積に関する記述が目立ちます。特に今出川キャンパスと京田辺キャンパスを重ね合わせた比較図は、キャンパス狭陰化解消の有効手段としての新キャンパス開校の意義を訴えかける上で、視覚的にわかりやすい内容になっています。

学部新設と地域連携

新キャンパス開校以降、大学の学生数の増加は如実です。1985（昭和60）年の在籍者1万9815人から2015（平成27）年の在籍者2万9166人へと9351人が増加しました。この事実から単純に規模が拡大していることがわかります。また、京田辺キャンパスに限れば、1994（平成6）年の工学部移転以降、2005（平成17）年文化情報学部設置、2008（平成20）年生命医科学部、スポーツ健康科学部設置、2009（平成21）年心理学部設置、2011（平成23）年グローバル・コミュニケーション学部設置と学部が増加し、キャンパス面積拡大に伴う、学部の多様化を実施してきたことがわかります。また、地域との連携も早くから行われ、1993（平成5）年から続く京たなべ・同志社ヒューマンカレッジの実施、2002（平成14）年に始まったスポーツフェスティバル、象徴的な事業は2005（平成17）年から始まった同志社京田辺祭、現在のクローバー祭です。広大なキャンパスとその特性を生かした事業を展開することで、新しい価値を創造しています。開校30年を迎える前年の2015年には同志社京田辺会堂光館・言館が完成し、キリスト教主義学校としての体裁を整えました。

おわりに

一躍進の地 京田辺

以上、第5期ラウンジ展示を概説してきました。京田辺キャンパスは、同志社の歴史の中では比較的新しい存在ですが、大学の経営方針上からも、歴史的関連性からも浅からぬものがあることはすでに述べたとおりです。現代においては、世界を志向する大学にあって、同時に地域とともに大学が如何にあるべきかを率先して実施しているのが京田辺キャンパスといえるかと思ひます。

※本文中〔「文久改正新增細見京絵図大全」部分（国立国会図書館デジタルコレクションより）を除く〕の画像は全て同志社大学同志社社史資料センター所蔵。

2017年6月1日 同志社スピリット・ウィーク春学期
京田辺校地「講演」記録

※数字は各年度発行の『事業報告書』（学校法人同志社）に依る

- 「文久改正新增細見京絵図大全」部分
（国立国会図書館デジタルコレクションより）
- 寄宿舎部屋割図
- 自責の杖
- 新島襄旧蔵聖書
- 戦後の風景 1958年
- 新島襄筆祝辞草稿「祝言」
- 同志社労働者ミッション設立宣言書及び入会申込書
- 『田辺校地について』
- 造成工事終了直後の田辺用地 1984年
- 開校直後の京田辺校地 1986年